



内でも見つけてね！

鷲と猿

わしとさる

一見、鷲が猿を捕まえているように見えます。しかしそうではなく、猿を鷲が助けているところなんです。

木登り上手の猿はその上手さにくらげられて、手を滑らせてしまいます。下には深い川に波が渦巻いています。そのままでは水におぼれてしまい、泳げない猿は水死です。

水に落ちかけている、危機一髪のところを鷲がさっと来て助けたのです。とっさのことですから、一見、捕まったように見えます。

猿はわたしたち。鷲は聖天様を象徴しています。

「意馬心猿」という言葉があります。

『わたしたちの心は、馬のようにきよときよとしていて落ち着きがない。』

人より優れていることがあったり、人にほめられたりすると、猿が木登り上手を自慢するように、すぐ慢心を起こす。あまりに調子になると、墜落して失敗する。人生をだめにしてしまうこともある。けれども、わたしたちはだれにでもそういう心がある。もし、墜落失敗したとき信心がないと、そのまま深い川の底に沈んでしまう。しかし、神仏を敬い、先祖を大事にする信心があればたとえ墜落失敗しても、聖天様が助けてくれる。』ということを表しています。

聖天様の本殿に誠にふさわしい彫刻です。



左甚五郎

ひだりじんごろう

この彫刻は左甚五郎が彫ったものです。本殿のうち奥殿が着工したのは享保二十年（一七三五年）、中殿の半分までが完成したのは延享元年（一七四四年）です。

左甚五郎は日光の眠り猫がとにかく有名です。その日光東照宮は三代将軍家光公が造られたものですから、妻沼の本殿はそれから百年の隔たりがあります。甚五郎がそのような長生きしたはずがないという人も多いです。

左甚五郎は初代利勝は文禄三年生まれ、慶安四年没。二世二代宗心は寛永九年生まれ、元禄十五年没。三世三代勝政は寛文六年生まれ、享保十二年没。四世勝忠は元禄十六年生まれ、安永八年没。五世四代は寛保元年生まれ、寛政三年没。以下についています。（左光拳著。新人物往来社刊「名工左甚五郎の一生」）
よって、この彫刻は四世か五世左甚五郎の作という解釈もなりたちます。

伝左甚五郎作というのが全国にあります。左甚五郎が固有名詞の域を脱して彫刻の名手の普通名詞となったのではないのでしょうか。あまり深く詮索しても夢がなくなるので、そう信じればよいのではないのでしょうか。とにかく「鷲と猿」は緊張感あふれる名作です。

また、甚五郎作に日光の眠り猫をはじめ、多くの眠り猫が各地にあります。

当山の猫は、眠らずに、牡丹にとまっていたるあげは蝶と戯れています。この彫刻も左甚五郎が彫ったものではないでしょうか。

ご感想お寄せ下さい。

院主 鈴木英全誌



妻沼聖天山 重要文化財「本殿」彫刻シリーズ①